

山中貞雄作品集

3 蘇工業学院图书馆
藏书章



山中貞雄作品集 3

一九八五年七月十月初版第一刷發行

監修 佐藤忠男
加藤泰

發行者 増田義和

印刷 東京研文社
製本 共文堂

發行所 實業之日本社

東京銀座 一―三―九
振替 東京 一―三―二六
電話東京五三五―二三〇二(編集部)
五三五―四四四一(販売)

山中貞雄作品集

3

目次

街の入墨者……………7

戦国群盗伝……………39

森の石松……………123

人情紙風船……………169

雑感 227

陣中日誌(遺稿) 附・戦線便り 235

(参考作品)
人情紙風船(三村伸太郎作) 253

解説 滝沢 一 345

解題 千葉伸夫 373

あとがき 加藤 泰 403

装幀 安彦勝博

写真提供 川喜多記念映画文化財団

大辺 豊

小山田幸生

協力 東京国立近代美術館

フィルムセンター

山中貞雄作品集

3

凡例

- 一、本作品集は、山中貞雄の脚色、原作並脚色、及び監督作品のうち、現存するすべてのシナリオを収録したものである。
- 一、底本として『山中貞雄シナリオ集』（上下巻、竹村書房刊、昭和十五年発行）を用い、シナリオ集未収録作品は初出誌に拠った。
- 一、旧仮名旧漢字を新かな新漢字に変えた。
- 一、文意を損なわない範囲で作品毎に字句の統一を図った。
- 一、読み易さを考えて、適宜、句読点をうった。
- 一、難読及び特殊な読みをするものと思われる漢字には適宜ルビを振った。
- 一、サイレント映画の字幕は、新かな新漢字のみにとどめた箇所も少なくない。

街の入墨者

街の入墨者 日活京都

原作 長谷川伸

脚色・監督 山中貞雄

撮影 松村植三

キャスト

岩吉

河原崎長十郎

三次郎

中村翫右衛門

おきち

山岸しづ江

おたね

深水藤子

ひー坊

宗春太郎

お雪

河原崎国太郎

目明し 松五郎

清川莊司

家主 六兵衛

市川笑太郎

浪人強盗 穴太与平次

坂東調右衛門

伊勢屋嘉兵衛

瀬川菊之丞

金兵衛親分

橘小三郎

鳶の頭 友吉

助高屋助藏

松五郎の乾分

山崎島二郎

金兵衛の乾分

市川岩五郎

友吉の若い者

沢村幸次郎

同

市川扇升

友吉の女房

原緋紗子

囚人

市川楽三郎

長屋の男 茂十

高勢実乗

1 鐘楼

夜更け。坊主が鐘をつきに行く。

2 境内

健太と岩吉が行く。

「こんなに遅く俺を呼び出して用と言うなァ一体何だね?」

「他でも無えが、健太、実ァ親分に頼まれたんだ」

「親分に?」

「うん」

「何を頼まれて来たんだ?」

「何を頼まれたか手前の胸に訊きァ凡そ察しはつく筈だが」

「えッ?」

「健太ッ」

「なッ、何でえ、この野郎、急に怖え顔で俺を睨みやがって一体どうしたッてんだ」

「健太、俺とお前たァ恩も恨みも無え仲だ。が俺達やくざには、やくざ仲間の義理ッてものがあるんだ」

「この野郎、何を言ッてやがンでえ」

「健太ッ、お前覚悟はいいだろうな?」

「おやッ、お前……一体どうしようッてんだ」

「親分に頼まれたんだ」

通りかかった目明し松五郎と兎分の亀吉とすれ違ふ。

岩吉、亀に突き当る。

「やい、気をつけやがれ」

「御免なすッて……」

捨台詞で、岩吉去る。

「亀、今なァ岩の野郎じゃ無かったか」

「へ? あ、そう言やァ確かに岩の野郎でした」

「おや?」

「親分、どうかしましたか」

「見ろ」

「何です、それァ」

「亀、いけねえ、此奴ァ血だぜ」

3 長屋

岩吉、逃げて来る。三次の住居へ入る。

「おきち、俺だ、岩吉だ」

「ま、兄さん？　こんなに遅くどうしたんですの」

4 三宅 内部

小供おたね（十歳位）久吉（赤ン坊）寝て居る。

おきち、岩吉を迎え入れる。

「いや、何んでも無いんだ。一寸用があつてこの近くまで来たんだが、お前ン処へ永え間御無沙汰して居るンでついでに寄つたんだ。三次さん留守かい」

「え、もう帰つて来る頃ですわ」

「ほー、二人ともよく寝てるね」

「今寝ついたところなんですの」

「おきち、お前、戸締りしねえのか」

「えッ？」

「もッ、もう遅いじゃねえか」

「兄さんッ」

「何だ」

「又喧嘩して来たのね」

「冗談言うねえ。喧嘩なぞするもんか」

「嘘仰っしゃい、手に血がついてるじゃ無い

の」

「えッ？　あッ」

「駄目ね、兄さんは、何時になったら乱暴が止まんの？」

5 街

三次、帰つて来る。松五郎と亀に逢う。

「三次さんじゃ無えか」

「これは親分さん、どちらへ」

「お前さん処へ行こうと思つてたんだ。丁度いいや一緒に行きましょう」

「何か私どもに御用がおりなさるンで」

「お前さんには用はねえ、岩の野郎だ」

「岩ッて？」

「お前のお内儀さんの兄貴じゃねえか」

「兄さんなら此処ンところ、ひと月ばかりお見えになりませんが」

「いや、今夜は来ている筈だ」

6 三宅の住居

おきち、岩吉の手に繃帯をしてやる。

「兄さん後生だから、もうこんな危ない事は止してね」

「なーに、お前はそんな心配をしなくていいんだよ」

「くどい様だけれど、ねえ兄さん、今の悪い友達と別れて堅気に暮そうと思わない」

「おきち、俺ア腹が減ってるんだ。飯を喰わして呉れ」

「うちの人が言っていましたの。兄さん、ひとが善いから必ツと仲間の悪い人達にうまく騙されて居るんだツて……私もそう思いますわ」

「茶漬けでいいんだ。早く喰わして呉れ」

「おきちは飯の仕度をはじめろ。」

「兄さんの好きな鰯の乾物があるんですの。焼きますしうか？」

「……………」

「おきち、乾物を焼く。」

「岩吉、小供のおもちゃなぞ玩ぶ。」

「しみじみ云う。」

「三次さんは堅気の職人だ、俺の様なやくざな兄貴が居ちゃ肩身が狭えだろうな？」

「……………」

「俺もなア、お前達の事を考えて、この仲間から足を洗おうと決心した事ア二度や三度じゃねえんだ。けどなアおきち、お前たち堅気のひとに話したって分って貰えねえが、俺達やくざにはやくざ仲間の義理ツてものがあつてな」

「……………」

「乾物焼ける」

「それに俺ア今の親分に、随分お世話になっているし」

「兄さんの親分ツて金兵衛さんでしょう」

「あー」

「あの人、この辺じゃひどい評判よ。蛇の様に嫌われてるわ、弱い者いじめをするし……」

「おい、おきちツ、俺の前で親分の悪口だけは止して呉れ」

「悪口じゃ無いわ。本当の事よ」

「なにツ」

「怒ったの、兄さん？」

「……………」

「おきち、飯の仕度をして、」

「お待ち遠さま」

「俺ァ帰るぜ」

「あらどうしたの、御飯食べないの」

「飯は喰わねえ」

「どうしてさ？」

「親分の悪口を言う奴の処で可笑しくって飯なぞ喰えるかッてんだ。フッ、三次さん帰ったらよろしく言ッて呉れ」

「兄さん、それがいつも兄さんの言うやくざ仲間の義理ッてもの」

岩吉、黙ッて出て行こうとする。

表に帰ッて来たらしい人声。

「おや」

「帰ったわね」

おきち、迎えに出る。

7 表

表戸を開けて三次と共に松五郎親分と兎分の亀吉。

「おきち、今帰ったぜ」

「早かったわね、あんた、今ね……」

「兄さん来てねえな。来てねえだろう。そうだろうな」

と目顔で示し、松五郎に、

「親方矢ッ張り来て居りません」

「三次さん、嘘を付いちゃいけねえ、サッ、どきな」

と土間へ入ッて、

「おきッつあん、この履物は一体誰ンだね」

その時、奥の岩吉、裏口へ逃げ出す音。

「あッ、野郎」

8 裏庭

岩吉、扉をとび越え逃げる。

松五郎と亀。

「岩吉、御用だ」

9 親分宅（昼）

金兵衛親分が岩吉に金子を与え、

「江戸に居ちゃ危ねえぜ、二、三年草鞋をはいちゃ、どうだ」

「へ、此奴ァ何うも有難う御座います」

「一刻も早く、発ったがいいぜ」

「ヘッ、じゃ、親分御免なすッて」

「岩」

「ヘッ」

「お雪には俺から訳を話して置こう。お前は寄らずに行ったがいい」

「へい、併し親分、旅に出りゃ二年や三年江戸へ帰っちゃ来られません。発つ前にお雪に一目会って……」

「馬鹿野郎ッ」

「……………」

「この界限でお雪とお前の仲を知らねえ奴アねえ、きッとお雪のまわりには役人が張り込ンでるに違えねえ。今逢いに行くなア飛んで火に入る夏の虫だ。いいか岩、お雪さんに逢っちゃいけねえぜ、おッ、手前達、岩吉を品川辺り迄送ってやんな」

10 品川辺り

海辺の街道。岩吉を送って兎分三名此処迄来た。

「此処迄来りゃもう大丈夫だ。有難う。帰って呉れ」

「岩吉、一寸待った」

「何だ、何か用か？」

「実ア俺達、親分に頼まれた事があるんだ」

「親分に？ 何を頼まれたんだ」

「岩吉ッ」

「なんだ」

「俺達、お前とは恩も恨みも無え仲だが、やくざにはやくざ仲間の義理ッてものがあるからな」

「な、何だと？」

「岩吉、手前覚悟はいいだろうな」

岩吉、驚き、

「じゃ、手前達俺の命を取れと親分に……？」

「そうだ。お前の首を斬って来いと親分の言い付けた。岩吉行くぜ」

三人抜く。立ち廻り。

波の音……

11 料亭の一室（二階）

親分金兵衛居る。

お雪、現る。(お雪は芸者と云う事にして置きます)

「今晚は、あら親分」

「お雪、随分待たせるじゃないか」

「あたし岩吉さんかと思つたわ」

12 料亭表

張り込んで居る目明し松五郎と兎分龜。

「今入つたなア確かにお雪だな」

「へえ」

「岩の野郎、きッと来るぞ」

13 元の一室

金兵衛とお雪。

「こんな話お前に聞かせ度くねえが、実は岩吉が人ひとり殺したんだ」

「まッ」

「殺つた相手は、お前も知つてゐるだろう。同じ

身内の建太さ」

「建太さんを？」

「困つた事をしでかしやがつたもんだ」

「岩さん今何処に居ます」

「直ぐ江戸をずらかつたらしい」

「大丈夫でしょうか」

「安心しろと言いてえが……」

「……………」

「お雪、あんな野郎の事ア器用に忘れッちまうんだね」

「何ですって、親分？」

「岩吉も可愛い奴だったが、他の兎分へのしめしがつかねえ」

「親分、まさか岩さんを……」

「実ア先刻身内でも腕の立つ奴を三人選んで岩吉の後を追わせた」

「岩さんを殺すつもり……？」

「何もお雪、そんなに眼の色変えて驚かなくつたつていいじゃ無いか。お前程の女、岩吉の様な三下野郎のものにしろくなア勿体ねえと俺ア以前から思つて居たんだ」

「親分、岩さんが可哀そうだと思わない？」

「それア思うさ。彼奴だつて可愛い兎分の人だ。俺ア彼奴を斬り度くねえよ。しかしなア